

# 里山教育の実践報告① ～ムササビとの出会いから始まるアクティブラーニング～ 内野彰裕（東京ゆりかご幼稚園）

## はじめに / 背景

本園は、創立以来、幼児の自然環境・体験を大切にしてきたが、身近な自然と深い自然とを、日常的に往来できる環境の重要性を感じ、平成26年に里地里山の一角にある場所に幼稚園を移転した。新たな園庭は、山、雑木林、草はら、池等、元からあった「ありのままの自然」を維持し、また不足する田畑、小川などは再生しながら園児、教職員、保護者と共に園庭を整備していった。これに伴い、自然豊かな環境に即したカリキュラムの見直しを重ね、「ESDとしての里山教育」の実践を深めて行った。本研究では、里山教育の事例として、ムササビとの出会いが園児の「主体的・対話的で深い学び」に至る過程を紹介し、その特徴について考察した。



●東京ゆりかご幼稚園の概要  
面積約2.2ha。周囲を47haの落葉広葉樹林(特別緑地保全地区)に囲まれ、キツネ、オオタカ、ムササビ、フクロウ等、多様な生き物が棲息。園児は園庭と樹林をシームレスに往来できる。

## 目的 / 方法

平成28年度、29年度における年長園児のムササビとの関わりについてのエピソードを、時系列に4段階の過程に分けて紹介し、新教育要領の「主体的・対話的で深い学び」の視点を基に考察することとする。

### Episode1-1

#### ●ムササビが幼稚園の森にいるらしい…

「絵本の部屋」にいる剥製のムササビは知っていたが、ある日、園長から「夜、園庭の『森のひろば』で、ムササビが木を登って飛んでいたよ。」という話を聞き、「僕も夜にムササビを見てみたい！」との声があがり、興味を示す…。



### Episode1-2

#### ●ファミリーキャンプでムササビを観察！

そこで、親子ファミリーキャンプを企画し、園庭にテントを張り、親子でムササビ観察をした。夜、園庭の「森のひろば」周辺の山道を歩くと、ちょうど上空に目がキラリ！「ムササビだ！」木を登り隣の木へ滑空。「とんだ！」姿を目にした親子は感動に包まれた。



### Episode1-3

#### ●多摩森林科学園にムササビを見に行こう！

ムササビの事をもっと知りたかった年長児は、いつも園外保育や森林教育でお世話になっている多摩森林科学園の森にムササビの巣箱があり、観察できるということを知り、見学にでかけた。



### Episode2-1

#### ●ムササビ博士に教えてもらおう！

巣箱で暮らせる事を知ると、園児は「幼稚園の森にも来て欲しい」と思うようになり、その方法を知るためムササビ博士の岡崎先生に來園頂いた。生態について教えて頂き、実際にムササビと触れ合う機会も得た。岡崎先生に質問を繰り返す、皆「小さなムササビ博士」になった。会には保護者も参加し、園児の学びを共有した。



### Episode2-2

#### ●学んだことを話し合い、まとめる

岡崎先生に教えて頂き、わかった事をクラス内のグループごとに話し合い、壁新聞にまとめた。また、廊下に壁新聞を掲示し、他のクラスの内容を見て、学びを共有した。



### Episode2-3

#### ●全園児、保護者の前で発表する

ホールで、全園児と保護者を前に、年長児が壁新聞を見せながら発表した。こうして幼稚園の森に棲むムササビについて全園児、保護者が共通理解をできるようになっていった。



### Episode3-1

#### ●巣箱をつくる

「ムササビが幼稚園の森ですみやすいよう、お家を作りたい！」という子どもの声に、岡崎先生が研究室の顕微鏡の箱を寄付して下さいました。これに年長児が穴を開け改良し、デザインを相談しながら色づけをした。



### Episode3-2

#### ●巣箱を森に設置

6個の巣箱が完成し、幼稚園の森に設置した。3月で卒園間近だったが、「卒園しても見に来る」という声や、後輩達に巣箱の観察と管理を委託し、ムササビが園にやってくることを思い描きながら卒園した。巣箱の前でムササビポーズ！



### Episode3-3

#### ●家の近くの森にもムササビの巣箱を…

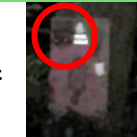
幼稚園でムササビに強い関心を持った子は家族に「家の近くにも巣箱を作って設置したい」と話した。園長に巣箱の作り方についての手紙を書き、実際に設置し、その様子を壁新聞に書いてきてくれた。⇒



### Episode4-1

#### ●新年長に受け継がれたムササビ観察

新年長に託されたムササビ観察は、新たな展開に。日中、年長児が森で遊んでいると、「リスだ！」と叫ぶ子が。担当が目で見つくと木を登り滑空する様子！リスでは無く本当にムササビに出会ったのだ！そして夜間には設置した巣箱から顔を出す様子も観察された！



### Episode4-2

#### ●巣箱の中の調査を

巣箱にはいつもいるわけでは無かったので、巣箱の補修を兼ね、中を調査してみる事に。すると杉の皮や苔でフワフワの布団を作ってあるもの、小枝だけでゴツゴツとした布団のもの等、様々な巣箱が見られた。そこで、2つを残し、他は中の布団を取り出し、新しく巣作りができるよう掃除をした。



### Episode4-3

#### ●歌を作ろう！

この年も岡崎先生にお越し頂き、継続的に学びを得た。巣箱内の形跡や食痕からムササビが確かに身近にいることが分かると、年長児の関心は更に高まり愛着を持つようになった。そして「ムササビの歌」を作り保育参観で保護者に披露した。  
**♪ムササビの歌 (作詞:年長児 作曲:年長担任)**  
ムササビのかわいい顔がキラリ！ムササビの食べた葉っぱを拾うぞ！ラッキー！夜の森で遊んでいるの？大好きなムササビ、遊びましょう！



## 考察 / まとめ

エピソードが進むにつれ、ムササビに対する見方・考え方が深まり、心を動かす様子が伺える。エピソード1はムササビに対して興味を抱ききっかけであり、エピソード2では興味を元に得られた知識を話し合い、深め合い、表現し合う。エピソード3では知識を活用し巣箱作りという行動に移す。初年度はこれで一旦終了となるが、エピソード4にある通り、先輩の姿を見ていた後輩が継続して興味を深め、ムササビからのアクションによって更に学びを深め、豊かな表現へと繋がっていく。恵まれた自然環境であるが故に、ムササビに出会うという貴重な経験を得ることができる。しかし、環境が豊かであるだけでは幼児の主体的な学びが継続していくことは期待できない。エピソードの各段階において、教師の意図したねらいの下、適切な援助が欠かせない。特に、1-2、1-3、2-1のように、大がかりな活動が展開する段階においては、幼児の「もっと知りたい。もっと関わりたい。」という気持ちに寄り添いながら、更に深い学びに繋がるよう、次の段階に向けた教師の援助や、専門機関の協力を得る等も必要となる。一方、これに続く2-2、2-3、3-1の段階においては、幼児同士が考えを出し合い協力し合う等、対話的な学びが頻繁に見られる。このように、段階によって教師の関わりや距離感を調節しながら、幼児の主体的・対話的で深い学びに向かう視点を捉えていく必要がある。また、3-3では集団から個の学びへと展開している。1-2、2-1、2-3、4-3のように保護者が参加する機会を経て、家庭と幼稚園とで情報が共有され幼児の気持ちや学びが継続、発展していくものとする。

### 謝辞

本事例中、中央大学附属高等学校の岡崎弘幸先生、多摩森林科学園の大石康彦先生には、園児のムササビへの関わりに沢山の御助言を頂きましたこと、感謝申し上げます。また、本取り組みにご理解を頂き、環境作りにご協力を頂きました保護者の皆様にも感謝申し上げます。

